

新刊
紹介

For some in ancient books delight;
Others prefer what moderns write:
Now I should be extremely loth Not
to be though expert in both

『結婚の障害』

——愛による連帯を求めて』

ポール・トゥルニエ著

野辺地正之訳

(ヨルダン社)

B 6判・一二二頁・三八〇円

結婚は男女の精神的肉体的な結びつきで、人間生活の実質的な内容をつくっている。結婚生活が幸福か、否かは二度と繰返しのきかない人生にとって重大な意味をもっている。結婚に入る動機、年令、その形態や様式は各国の文化や階級によって違つが、近代社会は少くとも男女の合意・理解・愛情を軸として結婚が行なわれ生活が展

開している。男女の平等、尊敬、人権の尊重という民主主義の原理的な価値理念は結婚生活のなかで結実しなければならぬのであるが、しかし、現実には、この期待に反して結婚による不幸と悲劇が相ついでいふ。アメリカは四組のうち一組、わが国は十組の一組が離婚している。愛情を喪失した結婚生活をつづけるより別れた方が幸せであるという積極的な離婚論がある反面、また、愛情で結ばれた夫婦がなぜ崩れ壊れるのか。離婚率の高まりとともに「夫婦」「男と女」、さらに「人間」という不可解なものへの新しい科学的な究明と理解が必要となつていふ。「結婚カウンセリング」は、まさに、この新しい課題に対応する専門分野であり、夫婦の实在を内省し、洞察する鍵をもつていふ。

本書は百ページ余の小冊であるが著者の四十年にわたる結婚カウンセリングの臨床体験から結婚生活の本質をわかり易く、短い言葉で端的に語りかけてくれる。愛情とは具体的にどのように表現されるのか、夫は妻に、妻は夫にどのように接するのが望ましいのか、誤解や間違いが起る理由な

ど、夫婦の基本的なあり方が一ページごとに明らかにされる。まず最初に結婚の障害を予防し、克服するために「理解しようとする心」をあげ、つぎに心を開かぬ夫を「神秘的な島」にたとえ、どうすれば「心のとびら」を開くことができるか、「勇氣」を強調し、勇氣に欠けると結婚に失敗することを語り、妻と夫を媒介する「愛」の作用と、「人はさまざま」のパーソナリティという両性は相互に完全に理解をすることにはむづかしく、男性の特性、女性の特性を説明して、この特性への自覚と理解への道を多くの事例をあげて述べ、「愛における男女」は決定的に違つるのであるが、この違いをどのように正しく理解し、それに対応することを強調している。さらに、夫婦の「助力と理解」「過去の役割」を述べ、キリスト者としての著者は、「キリストへの黙従」という経緯で信仰の果す役割の深さを語っている。さきの「」で示したところは、それぞれ独立した短い章であるが、著者は心理療法の臨床精神医としてジュネーブで実

際に仕事をしているだけに引用される事例や会話は迫真力があり、心の機微にふれ、深い共感を覚える。本書は、まさに、結婚生活の長短にかかわらず夫婦生活内省の書であり、これから結婚する若い人々にも是非読んで欲しい本である。人と人との断絶が叫ばれる今日、この小冊は温い愛情の世界を展開している。訳者は先きに著者の「強い人と弱い人」を訳し、また、同じ結婚カウンセリングの数少ない専門家でもあり、訳者として最適者である。本書の終りに訳者の「夫婦間の障害について」という障害原因について分り易く説明された小論が附けられているが、これは心理治療の専門的な指針として、また、本書を理論的に集約する貴重な結びともなっている。

(住谷 馨)

『キリスト教要義』

大塚節治 著

(日本基督教団出版局)

・B6判・三三五頁・一三〇〇円)

本書は、聖書、神、世界、人間、キリスト、救済、聖霊、教会、永生の各論の九章

からなっている。冒頭から神は自然を通して「その全知・全能者たるのみならず、その至仁至愛の性格をうかがうことができ」に驚かされるが、続く自然神学と啓示神学の関係づけは、これについての先生の結論である。三一神論は宗教経験と合致する基本的教義だとされ、その系譜と問題が簡潔にまとめられている。キリストの両性については「神の自己限定」、ケノーシス論が見解として示されている。代償的贖罪の立場、一般的恩恵での聖霊の業など目立っている。教会論では、本質、属性、機能(宣教、礼典の執行、隣人愛に集中)、教会と政治が論ぜられている。最後の永生論は先生の「信仰告白」であり、死を見つめて読む者には感銘深いものであろう。永生の場と時について、世界内の永生と彼岸の永生に分け、結局永生を彼岸に求めざるをえない。後者は死を転機として新たに開かれる世界であり、これに関して、死、不死と甦えり、中間期、人類全体の運命、歴史と自然の運命の諸問題が論ぜられている。甦えりについては、人間人格の主体としての精神の肉体内在の信仰からして、体

をもった靈魂の再創造であるとし、普遍的救済がとかれていた。歴史と自然の運命については、壊滅するものはその偶然性であり、本質は彼岸の世界に移され、そこに連続性と同一性がえられるとのべられている。最後の人格存続の論理は、先生の理と信仰の結晶化である。

私の手許に先生の講義プリントがある。三十年近くふるび、変色し、注意しないときれぎれになりそうである。九章のどれをとっても、このプリントに見られる長年に亘る資料と緻密な註釈を背景にしている。数巻に亘る先生の著作をのぞんでいたが、本書ではこれらが、先生の信仰生活の体験に洗いこされて表現されているように思われる。変革の状況の中で書かれているだけに、先生らしく抑えようとして抑えられないままのべられた見解もある。教会と政治などその一例である。トータルな人間存在と福音、歴史の問題は残されている。八十四才の先生の著作をよるこび、楽しみつつ学びゆかれるように念ずるものです。

(緒方純雄)